信の至難性

光地英学

一

大乗仏教にて特に信を強調するのは浄土教である。信は易きに似て、しかもそれを実とすることは容易ではない。この点浄土教に信の至難性の警語のあるゆえんである。この稿では、主として文献によってそのことを例証するに止めたい。浄土教にてこの難信について指摘しているのは、「大無量寿経」「阿弥陀経」および「称讃浄土経」である。すなわち

「人有二信慧一難」（「大経」巻下、正宗分）

「若聞二斯経一、信楽受持、難中之難無二過レ之難一」（前同巻下、流通分）

「釈迦牟尼仏、（中略）為二諸衆生一、説二是一切世間難信之法一。舎利弗、当レ知、我於二五濁悪世一、行二此難事一、得二阿耨多羅三藐三菩提一、為二一切世間一説二此難信之法一、是為二甚難一」（「小経」流通分）

「一切世間極難信法」（「称讃浄土経」流通分）

この他、実叉難陀訳、八十巻「華厳経」第一四に

「信楽最勝甚難レ得」（大正蔵十・七二C、「教行信証」信巻三一問答引文）

次に正統浄土教祖師についてみる。善導大師は「大経」の難信の意をうけて、「往生礼讃」初夜讃に「人有二信慧一難、遇レ聞二希有法一、此復最為レ難」「自信教レ人信、難中転更難」と歎述し、「法事讃」巻下（後行分）に「浄土難レ聞今已聞、信心難レ発今已発」と宣述している。源信僧都は「往生要集」巻上、本（一、厭離穢土）に、「縦遇二仏教一、生二信心一亦難」として難信性を表明している。親鸞聖人の場合は、獲信の至難さを吐露することが殊に著しい。いうまでもなく浄土教にて、最も信を高揚しその宗教思潮の核心を信においている聖人であるだけに、信に対する心構えの並々ならぬもののあることを、以下に示す如きその難信性の強化によっても充

分類いうる。

親鸞は「大経」や「小経」「称讃浄土教」の意によって、難信を次の如く表白している。「是以無上功徳、難二亘値遇一、最勝浄信、難二亘獲得一。（信巻）「信楽受持甚以難、難中之難無レ過レ斯」（正信偈）「易往無人之浄信、（中略）世間難信之捷径」（信巻、本、大信釈）「大信心海甚以亘レ入」（化巻、本、三経隠顕）「真実浄信実難レ得」（文類聚鈔）「真実浄信億劫亘レ獲」（「教行信証」総序、「文類聚鈔」）「真宗亘レ遇難レ得レ信、難中之難無レ過レ斯」（入出二門偈）「善知識にあふことも、おしふることもまたかたし、よくきくこともかたければ、信ずることもなをかたし」（「浄土和讃」大経讃）「一代諸教の信よりも、弘願の信楽なをかたし、難中之難ときたまひ、無過此難とのべたまふ」（「前同」大経讃）「十方恒沙の諸仏は、極難信ののりをとき、五濁悪世のためにとて、証誠護念せしめたり」（「浄土和讃」弥陀経讃）「真実信心うることは、末法濁世にまれなりと、恒沙の諸仏の証誠に、ゑがたきほどをあらはせり」（「正像末和讃」三時讃）「不思議の仏智を信ずるを、報土の因としたまへり、信心の正因うることは、かたきがなかになをかたし」（前同、三時讃）「この信心をえがたきことを『大経』には『若聞斯経信楽受持、難中之難無過此難』とをしへたまへり、『小経』には『極難信法』とみえたり。この文のこゝろは、この経をきゝて信ずることかたきがなかにかたし、これにすぎてかたきことなしとなり。釈迦牟尼如来は五濁悪世にいでゝこの難信の行を行して無上涅槃にいたれりとときたまふ。」（唯信鈔文意）なお親鸞の難信の側面的証左ともいうべきものに、報土の易往無人思想がある。蓋し真実信を獲得し難いことが、真実報土に往生し難いことと一倶であるからである。親鸞は「大経」下、「往生要集」下末、さらにまた「安楽集」上、「楽邦文類」五、「唯信鈔」などによって、実報土に往生し難いことを示している。親鸞は「大経」の「易往而無人」について、「大信心者、則是長生不死之神方、忻浄厭穢之妙術、選択廻向之直心、利他深広之信楽、金剛不壊之真心、易往無人之浄信」（「信巻」首）といい、「無人といふはひとなしといふ、人なしといふは真実信心の人はありがたきゆへに、実報土にむまるゝ人まれなりとなり」（広本、「銘文」本）という。また「歎異抄」一七に「信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらうを、（後略）」とある。また「往生要集」下巻の文（釈浄土群疑論）によって、「報の浄土の往生は、おほからずとぞあらはせる、化土にむまるゝ衆生をば、すくなからずとおしへたり」（高僧和讃、源信讃）と和讃している。また「正像末和讃」三時讃に「報土の信者はおほからず、化土の行者はかずおほし。自力の菩提かなはねば、久遠劫より流転せり」と詠歎している。いずれも真実正

信の獲難いことの表闡に他ならない。

このように、浄土教学なかんづく親鸞教において獲信の難いことは明瞭である。何故であるか、浄土と阿弥陀仏の実在性の問題が、難信の重要事項であると思われるからである。

二

一方、道元禅にても軌を一にしていい得る。道元以前、「普照禅師修心訣」に、大機根のものでなければ正信を生じ難いとして次の如く開示している。「而此妙旨雖二是諸人分上一若非下夙植二般若種智一大乗根器者上、不レ能二一念而生二正信一。豈徒不レ信、亦乃謗讟返招二無間一者、比比有レ之。」これは、一般的について信の難事なことの説示であるとみてよい。況んや道元における本証の信は、いい易くしてそれを実となすことは、まことに至難である。衆人何れもいう如く本証を信じ得るか。自己の打坐が証上の妙修としての打坐であることに一念の疑点もないであろうか、坐外の日常生活が心意識の乱調と共に、道に即応しないまま、しかも修証一如の信上の妙修の信が確立されていると、自ら信受信認しうるであろうか。乱脈裡の生活相が妙修として許容されるならは、「永平清規」等の厳粛な諸規程や諸説示の意義は那辺にもとめたならばよろしいのであるか。この点、秋山範二教授も強調されているところである。（雄山閣発行「禅」第五巻所収「禅と生活」三六頁）かくてその信に疑義・破綻がないか。あるいは信じ得るものもあるであろうが、そうではなくして信じ得られないもの、あるいはまた信の不徹底なものもあるであろう。かかる信の容易でない点、敢えて浄土教のそれに優るとも劣ることのないものがあるとなしうるではなかろうか。